
若草山三千桜

義雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若草山三千桜

【Nコード】

N3187Z

【作者名】

義雄

【あらすじ】

明日は全国的に晴天となるでしょう。ですが、奈良県では夕方から天気が崩れ、ところによりにわか鬼火です。また、奈良県全域に餓鬼注意報も出ていますので、お出かけの際はお地藏様を忘れないよう気を付けてください。

鹿が空を舞い、仏像型ロボットが地を走る。神も悪魔も仏も鬼も、幽霊妖怪なんでもござれ。そんな、少しずれた日本の奈良県で暮らす主人公（ヒロイン系）のお話。

奈良と地蔵バッグと僕（前書き）

この物語はフィクションかつカオスで罰当たりです。神も悪魔も
仏も鬼も、幽霊妖怪なんでもござれ。

奈良と地蔵バッグと僕

『続いては地域のニュースです。本日は明日香村で埴輪祭が行われました。千体もの埴輪が道いっぱいに行進する様を、地域の人たちや観光に訪れた方々が楽しそうに見られていました』

『いや、これは毎年のことながらすごいですね』

『ぴよこぴよこと跳ねて動く埴輪が可愛らしくて、お子さんたちも顔をほころばせていますよ』

テレビの中ではニュースキャスターがうつすら微笑みながら今日の出来事を読み上げている。

この時間帯はチャンネルを回しても見るものがない。

ぼんやりと画面を眺めていると、確かに埴輪のコミカルな動きは少し笑えてくる。

『午後からは奈良市内で新人警官による>RUBY<>RB<騎鹿隊>RT<きかたい>/RUBY<行進があります。普段は見せない鹿たちの雄々しい姿が見られるこれ以上ない機会なので、是非見に行かれることをおすすめします』

『鹿せんべいをねだる様子からは想像もできないほど素晴らしい動きを毎年披露してくれますけれど、今年はどんなイベントになるでしょうか』

『明日が楽しみですね。この後のお天気情報でもお知らせしますが、明日の奈良県は夕方から天気が崩れ、ところによりにわか鬼火です。奈良県全域に餓鬼注意報も出ていますので、お出かけの際はお地蔵様を忘れないよう気を付けてください』

「うわ、餓鬼注意報か。地蔵バッグはっ」と

クローゼットの中をかきわけ、一番奥から石っぽい質感が頼もし

い地藏バッグが出てきた。

誕生日プレゼントとしてもらった宝印ブランドものなのに、と我ながらぞんざいな扱いに苦笑する。

頭の部分にあるファスナーを開けてひっくり返すと、仏様と鹿が合体したようなマスコットキャラのキーホルダーがころりと落ちた。かわりにレトルトのお粥と筆記用具、大峰山の美味しい水、清め塩を放り込んで明日の準備は万端。

小物入れの塩のストックも最後だった。

「明日購買行かなきゃ」

そこそこの時間になっていたのでベッドに転がり読書にいそしむことにした。

『これなら納得！ 般若心経』はもう読み終えた。『鑑真とガンジー、その共通点』もそんな気分じゃないなあ。

漫画スペースに目を移す。

最近新装版の出た『オートマタ雑技団』は泣きまくっちゃうからダメだし『九頭龍高校ホステス部』、『釈迦に届け』も違う。『教皇陛下の料理人』でもない。

思い悩んだ末にゲームの攻略本を手についた。

明日は『ARMORED BUDDHARUPA 3 SILENT GANDHARA』をやるぞ。

『クシャーナ磨崖仏開発工場救援』というミッションでどうしても天道ランクがとれない、せいぜいが人間道までだ。

どうにも攻撃に専念しすぎて上から降ってくる衛星バジユラ砲に対応できない。

回避重視の軽量で行くか、重量系高火力で攻めるか、きっちり仏像構成も考えておかないと。

「スパディア（スーパーディアティール大戦）とミックスしてくれないかなあ」

百を超える色々な仏具を組み合わせさせて機体を造れる仏像アクションゲームと、世界各地の神様を雑多に混ぜ込んだ戦略ゲーム。

二つが合体すると、もう収集がつかないくらい楽しそうなのに。

ほどなく眠気がやってくる。

電気を落として僕は夢の世界に旅立った。

若草山三千桜

春眠暁を覚えず、とは誰の言葉だったか。

ずいぶん前に習った漢詩だったと思うけれど忘れてしまった。

まあ、何が言いたいかと言うと。

「眠い……」

風もない穏やかな日だ。

夕方から怪しくなると聞いていた空を見上げても雲一つなくて、柔らかな日差しがこれまた気持ちいい。

ブロック塀沿いに時折目にかかる餓鬼さえいなければとてもいい日だったに違いない。

見かけるたび般若心経を唱えてやるのだけれど、いい加減バッグの中身も軽くなってきた。

学校に着くまでお粥と水が持つかな。

とは言えお経を唱えて地藏バッグの中にある飲食物をお供えしないと今度は僕が取り憑かれる。

朝っぱらからハラペコになるのはゴメンだし、脂肪吸引されるのもイヤだ。

池のほとり、いつもの待ち合わせ場所についてベンチに腰掛ける。満開の桜が綺麗だった。

「おはよー」

「おはよ」

日向ぼっこをしているカメになんとなく目をやっていると、同級生が近づいてきた。

「いい天気やねー、まさに行進日和って感じ」

「おじさん今年も？」

「うん、鹿せんべいを忘れるアホが毎年おるって朝からぼやいたわ」

彼女は若草かの子。胸元に金糸で校章を繕った紺のブレザーに身を包み、学生帽をかぶり、背中に赤い牛皮製ランドセルを背負った鹿だ。

つぶらな瞳と艶やかな毛並み、ところどころにある白い斑点がチャームポイントだとか。

いわゆる僕の幼馴染というヤツでなおかつ腐れ縁。幼稚園からの知り合いだけど十七になっても同じ学校に通っているだなんて、想像もしていなかった。

「あれ、手袋とブーツ新調した？」

「お、よー気づいたやん。始業式やから気分一新、今日からアグレッシブに生きるで！」

前足には明るいチエック柄のミトン、後ろ足には黒いブーツを履いていた。

おしゃれさんな彼女らしくセンスがいい。

「自分も地蔵バッグ使ってくれてるやん」

「……まあね」

昨夜まで埋もれていたとは、とてもじゃないが言えない。

「その格好つてことは今日一日は二足歩行で過ごすんだ」

「一日目やし、そんなくらい気合をいれていく！」

鹿は基本的に四足歩行なのだけれど、彼女みたいなお洒落さんは二足歩行を好むらしい。

ただ直立するのはそこそこの筋力とテクニクを必要とするみたいだ。

飲食店や土産物屋が立ち並ぶアーケード街で、ちらほら目に入ってくる他の鹿はやっぱり四本足でのんびり歩いている。

ここら辺まで来ると早朝からお坊さんか巫女さんあたりが被ったのか、餓鬼の姿は見えなかった。

背中ので蔵バッグはまだしっかり重いしこれで一安心だ。

「猿沢池の桜も満開やし、明日の入学式はばっちりやね」

「僕らにはあまり関係ないけどね」

「新人生確保せなあかんやろ」

「弓道部のスタンスは自分との闘い、無理やり新人生を引っ張ってくるのはかわいそうということだ」

「次期部長候補やん、もつとハングリー精神に溢れなあかんって」

「柳生さんがきつとやってくれるさ」

他愛もない話をしていると商店街を抜けて駅前に着く。

今日も行基像は鈍く輝いている。

「あ、青やったのに」

運悪く信号が変わったところだった。

「今年度もはじまるなあ」

「せやな、来年は受験やから青春を謳歌するなら今年しかないで」

「青春と言われてもピンとこないや。にしても来年は受験か」

「関関同立？」

「や、まだ決めてない。がんばれば神戸あたり狙えるかもしれないし」

「おー、やるやん。一人暮らしはじめたら泊めてな。三ノ宮とか中華街とかぶらついてみたいねん」

「まだ受けてないし受けようかも決めてないよ。そっちは？」

「市立か府立かなあ」

かの子が前足を額に当てて首を振った。

「あかん、春らしくない気分になってきたわ」

「もうやめとこう。明日は明日の風が吹くってね」

話が途切れたと同時に信号が変わった。
ここを渡れば学校まであと少し。

「そっぴや『枕』の薬師寺ライブ、チケットとった？」
「ばっちり。今から楽しみやな」

互いが好きなバンドのライブや、他愛もない話をしてるともう
学校だ。

「あら、鹿っ子とその飼い主じゃない」
「む」

校門の寸前で声をかけられた。

どれだけががんばって染めたとしても再現できないほど綺麗な金髪
に黒のメッシュ、ついでに長いツインテール。

高い身長と釣り目で気の強そうな顔立ちの、ブレザーに身を包ん
だ見た目だけはパーフェクトな女の子だ。

「トラちゃんぐっもーにん!!」
「おはよう張子さん」

信貴山にある大きな張子の虎を知っているだろうか。
人なんかよりもよっぽど大きなそれは去年のお正月に生誕九十九
年を迎えた。

その瞬間彼女は、張子虎珀は生まれたそっだ。
ついでに変身能力まで手に入れて高校生活を楽しむためにウチに
入学したとか。

名物の巨大虎がいなくなった信貴山は新たに一回り大きなヤツを
作って「また九十九年もたせてみせる！」と息巻いているらしい。

「お、おはようございます……」

それはさておき、彼女にはどうしようもない欠点があった。自分から言う分には一切問題ないのだけれども、会話が苦手なのだ。

詰め寄られたり会議になれば頷くしかできない、まさに張子の虎の付喪神。

さっきまでの強気な態度がどこかへ消し飛んでしまったように、顔を染めて恥ずかしげに俯いている。

「トラちゃんその性格なおさな……」

「わかってるんですけど……」

そんな性格を知ってか無理やりにも彼女にアタックする輩は一時すごく増えた。

その窮地を救ったのが我が幼馴染、かの子だ。

自慢のおみ足で群がる野郎どもを文字通り蹴散らしす様は映画のヒーローみたいだった。

それ以来かの子は張子さんにすごく懐かれている。

「そっいや同じクラスになれるかなー」

「……なれるといいですね」

「二年連続は難しそうかな」

どんな一年になるのか、少し楽しみだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3187z/>

若草山三千桜

2011年12月11日01時53分発行